

自分の頭蓋骨片使う再生医療

脳梗塞治療へ 幹細胞を投与

広島大

広島大学院医系科学研究科の堀江信貴教授（脳神経外科学）たちのチームは7日、脳梗塞患者の頭蓋骨

頭蓋骨由来の幹細胞を使った脳梗塞の再生医療の流れ



片から培養した幹細胞を本人に投与し、脳の修復を図る再生医療の臨床研究1例目を実施したと発表した。

世界初の取り組みという。まひや言語障害などの後遺症を軽減する効果や安全性を確かめ、脳梗塞の新しい治療法の確立を目指す。

幹細胞は約4週間かけて約1億個まで増やす。1例目は広島大病院で治療中の患者で、8月、静脈に培養した幹細胞を点滴で投与した。研究チームは、幹細胞は体内で神経細胞などに分化し神経組織の回復を助けるため、リハビリ単独よりも後遺症を軽減できるとみている。
中等症以上の患者を対象

とし2023年末までに、計6例を目標に臨床試験を続け、効果を検証する。

脳梗塞の患者は脳が腫れて死に至る危険がある場合、脳圧（頭蓋内の髄液の圧）を下げるために開頭手術を受ける。研究チームは、この際に外す頭蓋骨から骨片を採取して幹細胞を培養すると、腸骨から骨髓液を

取って幹細胞を培養するより運動機能の回復効果が高いことを動物実験で確認。患者への臨床研究につなげた。

研究チームの弓削類教授（生体環境適応科学）は職場に復帰したいと願う患者の希望に添えるような医療にしていきたい」と話している。（下高充生）